

## 古代日本と濟州

淑明女子大学校 教授  
金 善 民

濟州は韓国の南西海上に位置する島である。古代では耽羅等と呼ばれ、朝鮮半島の諸国と頻りに交流を行っている。5-6世紀には史料上に耽羅国と記され、この時期はある意味では国家の形が出来ていると推測されている。ところが、その実体については未だに明らかではない。『日本書紀』には七世紀後、すなわち百濟滅亡直後（661）から何度も日本に遣使したことが記されている。また、日本からも耽羅へ遣使しているのが確認される。以降、奈良時代においても史料上に日本と耽羅との交流を示す記事が見える。一方、韓国の古代史料には日本と耽羅との交流を表すものは殆んど存在していない。但し、耽羅国の建国神話に日本との係わりが窺える。

### (1) 既存の論点

- ① 百濟滅亡直後 日本との 関係<sup>i</sup>
- ② 耽羅方朮と耽羅鯨<sup>ii</sup>

### (2) 州胡と 中韓

- ① 『三國志』「魏書 東夷傳 韓條」

又有州胡 在馬韓之西 海中大島上<丁謙曰 州胡 卽今之濟州無疑> 其人差短小 言語不與韓同 皆髮頭如鮮卑 但衣韋好養牛及猪 其衣有上無下 若如裸勢 乘船往來 市賣中韓

- # 鮮卑説
- # 倭人説

### (3) 朝鮮三國と 耽羅

- ① 『三國史記』「百濟本紀」 文周王(476)二年 夏四月

耽羅國獻方物 王喜 拜使者爲恩率。

- ② 『三國史記』「百濟本紀」 東城王(498) 二十年八月

王以耽羅不修貢賦 親征至武珍州 耽羅聞之 遣使乞罪乃止 耽羅卽耽牟羅。

- ③ 『日本書紀』「繼體紀」 二年十二月 南海中耽羅人 初通百濟國

- ④ 『三國史記』「高句麗本紀」 文咨王(503) 十三年 夏四月

遣使入魏朝貢 世宗引見使芮悉弗於東堂 悉弗進曰 小國係誠天極 累葉純誠地產土毛 無衍王貢 但黃金出自 夫餘 珂則涉羅所產 夫餘爲勿吉所逐 涉羅爲百濟所并 二品所以不登王府 實兩賊是爲 (下略)

- ⑤ 『三國史記』「新羅本紀」 文武王(662)

二年二月 耽羅國主佐平徒冬音律<一作津> 來降 耽羅自武德以來 臣屬百濟 故以佐平爲官號 至是 降爲屬國

- ⑥ 『三國史記』「新羅本紀」 文武王(665)

五年 秋八月 於是 仁軌領我使及百濟耽羅倭人四國使 浮海西還 以會祠泰山

- ⑦ 『三國史記』「新羅本紀」 文武王(679)

十九年二月 發使略耽羅國

(4) 耽羅国の建国神話

- # 三姓神話: 高乙那, 良乙那, 夫乙那と三人の日本女性との結婚(五穀)
- # 九州地域との係わり
- # 農耕文化の始まり
- # 『高麗史』: 15世紀の記録

(5) 百濟滅亡後 耽羅と日本

表: 『日本書紀』に見える 耽羅使の来日

연도	派遣人物	派遣内容	備考
661	王子 阿波伎	貢物	
665	使	來朝	
666	王子 姑如	貢物	
667	佐平椽磨	貢物	
669	王子久麻伎	〃	五穀種子下賜
674	王子久麻藝 都羅 宇麻	天皇即位 祝賀	(太乙上) 授與と衣冠下賜
676	王子久麻伎		
676	耽羅王 姑如		
677	耽羅 客		船1隻下賜
678	王子都羅		
688	佐平加羅		饗宴, 物品下賜

- # 耽羅使 20回
- # 王が自ら使いとして来日
- # 王と 臣下が佐平 (同一)
- # 遣使の目的
- # 耽羅国の実体

① 『日本書紀』「天武紀」(674)

二年閏六月壬辰 耽羅遣王子久麻藝・都羅・宇麻等朝貢。因命大宰。詔耽羅使人曰。天皇新平天下。初之即位。由是唯除賀使。以外不召。則汝等親所見。亦時寒波峻。久淹留之。還爲汝愁。故宜疾歸。仍在國王及使者久麻藝等奉賜爵位。其爵者大乙上。更以錦繡潤飾之。當其國之佐平位。則自筑紫返之。

- # 記述の特異性
- # 大乙上= 佐平(?)
- # 東夷の小帝国の構成要素

i 森公章「古代 耽羅の歴史と日本-七世紀後半中心」『朝鮮學報』118輯, 19895. 笈 敏生『耽羅王權と日本』『耽羅文化』10輯, 1990,  
 ii 森公章「耽羅方補考」『續日本紀研究』226, 1986. 『周防國正税帳』 耽羅方補肆具價稻陸十束<具別十五束> 『延喜式』「主計上, 調」耽羅鮓 三十九斤(肥後國).... 耽羅鮓 十八斤(豊後國)